



荷風の文芸空間に“理系感覚”という一本の補助線を引いてみる

訪問者 坂崎 重盛

梅雨霽れて影透きとほる葡萄棚 (露)

『日和下駄』、「第三 樹」の次は「第四 地図」。

世に地図ほど、便利ではあるが無味乾燥、即物的な情報表現はないだろう。ドイツに留学した森鷗外は、かの地で有名なベデカの地図と接し、帰国後、明治四十二年、この方式で東京地図を企画・監修する。タイトルは「森林太郎立案」「東京方眼図」(春陽堂刊)。鷗外立案のこの地図の新しいところは、書名にあるように、タテ軸とヨコ軸の方眼、グリッドによって場所位置を表し、索引を付けたことである。

たとえば牛込〇〇町の位置を地図で調べたいと思ったら、地名索引の、いろは軸の「は」と、数字軸の「三二」といった表示で確認することができる。ドイツ由来の近代にふさわしい地図といえる。

鷗外先生、この『東京方眼図』が、よほど自慢したかったのか、漱石の『三四郎』に対抗して書いたといわれる『青年』の主人公に、ちゃっかり、この地図を持たせ東京を歩かせている。

ところで、荷風散人は「地図」について、どんな地図を、どのように日々の散策に活用したのだろうか。

づけてのべる。

これは何も今時出版する石版摺の東京地図を嫌って殊更昔の木版絵図を慕うというわけではない。日和下駄曳摺りながら歩いて行く現代の街路をば、歩きながら昔の地図に引合せて行けば、おのずから勞せずして江戸の昔の今と目をあたり比較対照する事ができるからである。

これを単に懐古趣味と言ってしまうとしたら、散人の「凄み」に対して、あまりにも無警戒、お人が好すぎる。もちろん荷風には過ぎ去った江戸、江戸文化に対する思いは深い(とくにアメリカ、フランスから帰国してから)、リアルタイムの東京という都市、風俗にも鋭敏、冷笑的な視線を注いでいる。

考えようによっては、荷風は、タテヨコの軸で確定される二次元の近代的地図に対して、現実を歩く場合に友とする江戸切絵図の力を借りて、現実の都市の姿に江戸の光景を二重写しにしようと目論んだと思える。つまり、タテ・ヨコ軸、グリッドの二次元の地図に対し、江戸という時間、気配をも付加した、三次元、



明治42年、春陽堂より刊行された鷗外立案の近代的スタイルの地図。表紙裏にこの地図の使い方の紙が貼られている

その書き出し。

蝙蝠傘を杖に日和下駄を曳摺りながら市中を歩む時、私はいつも携帯に便なる嘉永板の江戸切絵図を懐中にする。

おや? あの合理主義のかたまりのような荷風先生、敬する鷗外先生立案の近代的東京地図ではなく、江戸の地図を愛用、頼りにするのは。散人、その理由をつ